言語治療

ことばの異常な子どもの指導

どもりの子ども（1）

田口恒夫

数あるコトバの病気のなかでも、どもりは一番よく人に知られているもののひとつです。

古くからよく知られ、問題にされてきたことですから、これについての研究報告も数えきれないほどたくさんあります。ところが、一方、またこれほど議論や学説の多い病気もありません。ともかく、どもりについては、いろいろと〝ふしぎ〟なことが多いので、原因についても治療法についても、もろもろの学派が乱立してしまっていて、何とも収拾がつかないというのが現状です。

しかし、どもりに関して、はっきりわかっていることも相当ありますから、わかっていることと、まだわかっていないことを整理しながら、この問題について説明し、わかっていることにもとづいて、こういう子どもを取り扱ううえの参考になりそうなことを述べてみたいと思います。

〈わかっていること〉

いままでの報告で、ほぼ異論のないくらいはっきりしていることは、次の三つです。

㈠ 約百人にひとり（一％）の割合で、どもりの子どもがいる。

㈡ 女の子より男の子に多く、男対女の比は約三対一あるいはそれ以上（たとえば六対一）である。

㈢ 大部分（約八割）のどもりは、二才ないし四才の頃に始まっている。

これらのことは、ふしぎなことに、世界各国とも、今も昔も、ほぼ共通した事実なのです。これらのこと、とくに㈢のことを考えてみると、どもりの発生や予防に当って、幼稚園年令の子どもの取り扱いがいかに大事であるかがわかります。

どもりの特徴

どもりにはふしぎな特徴があります。それは、時とばあいによってどもりかたがひどく変るということです。そして、どんなに重いどもりの人でも、話しているコトバの八割以上についてはどもらずに（まったく正常に）話しているのです。

一、どもるという不安の少ない時ほど、どもらなくなる。

「いま、この人にこのことをぜひ、言っておきたいので、どもったら困る」という時ほど、どもる回数も程度もひどくなる傾向があります。

二、聴き手によって、どもりかたが変る。

批判的な態度できいている人の前ではひどくなります。聴き手の数が多くなるとひどくなりますし、気のない相手の注意をひこうとしながら話すときもひどくなります。

三、何かを話してひとに〝伝える〟必要の少ない時はどもりかたも軽くなる。

〝どもりの歌上手〟ということや、ひとりごとではどもらないことなどは、このためです。

四、話し方を変えると、どもらなくなる。

たとえば、〝腹に〟イキを吸ってから話すとか、わざとゆっくり言ったり、どなったり、ひとまねをして（コワイロを使って）話したり、囁き声で言ったりすると、どもらないことが多いものです。

このように、なにか〝特別なこと〟に注意を向けながら、意識してふだんと違ったやり方（注意転換法）を使うと、どもらなくなります。ただし、これが効くのは最初のうちだけで、馴れっこになってしまうと効果がなくなり、その後かえってわるくなることが多いです。

五、動作をしながら、それに合わせて話すとどもらない。

これも一種の注意転換法で、足で拍子をとるとか、手で∞の字を描くとか、机を叩くとかお遊戯をさせるとかしながら話せば、どもりません。

六、自分をよくみせたいという気持や必要のない時は、あまりどもらない。

一般に、うまく言おうとして緊張すると、どもりはひどくなる傾向があります。

以上のように、症状がときによってひどく変動することが、どもりの一番の特質です。

どもりの原因

ほんとうの意味での〝原因〟は、まだわかっていません。したがって定説というものもありませんが、学説はたくさんあります。そのうちのいくつかを紹介しますと、

㈠　誰かが子どもをどもりだときめつけ、そういうレッテルをはることが、原因になるという説

もともと二才から四才くらいの子どもは、たびたびつっかえつっかえ、くりかえしながら話すのが正常なことなのに、それに対して親が心配を始め、〝どもり〟ではないかと思い込んでうるさく注意すると子どもがコトバの話し方そのものを気にしはじめ、本当のどもりになっていくというのです。ちょっと考えるとたいへんおかしい考え方のようですが、この考えがいまアメリカでは一番広く信じられています。というのは、こういう考え方にもとづいて指導すると、幼稚園年令のどもりの子どものどもりが、実によくなるからなのです。

(二) もともと、どもりになりやすい体質や気質をもっているのだという考え

二才から四才の、最も激しくコトバを習いおぼえる時期に、身体的または心理的にもろくできているために、つまづき、どもりを起すという説です。

(三) 左利きを右利きになおすとどもりになるという説

この説にもまだいろいろ問題があり、利き手をなおすことが生理的に（神経生理学的に）いけないのか心理的な問題なのかは不明です。ただ、もともと左利きの子を右になおしたものを、再び左に戻してあげる訓練をすると、それだけでどもりが治ってしまうことがあるので、いまでも時に問題になっています。

(四) 話す能力にくらべて話したいという意欲の強すぎる子どもがどもりになるという考え

(五) 子どもの心の内に、なにか強い情緒的な問題があり、それがどもりという症状として、そとに現われるのだという説

以上のように、いろいろと考えられています。みなそれぞれ多少の根拠はありますし、それに当てはまるような子どももいますが、どれひとつとして、どの子どもにも当てはまるというような説はありません。

どもりの経過

ほんとうの原因は、よくわかっていないのに反して、どもりがどのようにして始まり、どのようにして悪くなっていくかということと、それに関してどのような事がらが関与しているかという、どもりの〝経過〟については、比較的よくわかっています。また、実際に子どもを指導する場合には、〝もともと何が原因でどもりはじめたか〟ということよりも、〝どうしてどもりがひどくなってきたのか〟ということと、〝なぜいままで治らなかったのか〟ということの方が、重要な問題になってきます。

一、まず何かわけがあってどもり始める。

二、はじめは、ふつうに話している時が多く、時々気になる程度で、本人は全く気にしていない（一次性のどもり）。

三、まわりの人が気にし、困ったなというような様子をしたり、話し方に注意を与えたり、治そうとしたりする。

四、子どもが、話し方を気にし、異常を意識し、話す前に気をつ

けようとする。

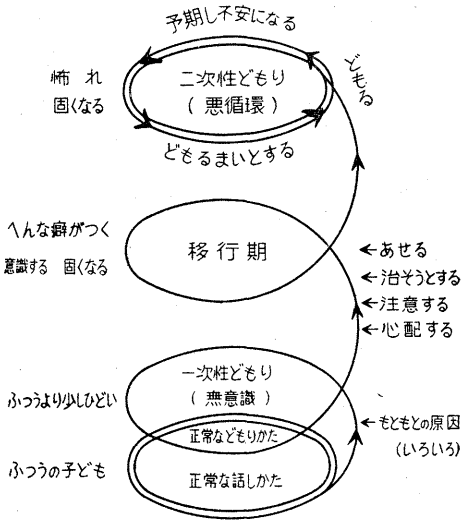
五、気になるので、固くなり、うまく話せない。

六、無理に話そうとして、体に力を入れたり、顔をゆがめたり手足を動かしたりして、悪いくせのある話し方になる。

七、まわりの人も本人もどもりを認め、何とかして〝どもるまい〟〝どもらせるまい〟と思っていろいろと工夫をする。

八、苦がい経験が重なるにしたがって、苦が手な相手や、音や、条件が決まってくる。

どもりの経過



九、どもりはしないかという予感がし、どもったら困るという怖れをもち、何とかしてどもりからのがれようとして固くなり、結局余計ひどくどもるという、悪循環ができ上ってしまう（二次性のどもり）。

十、そしてそのために、その人の性格や社会適応性がゆがめられてしまう。

というのが一般的な経過です。

〈治療の方針〉

以上のことからおわかりのように、一次性のどもりの状態にある子どもは、たいへんタチがよく、治りやすいわけです。そして、この時期における指導の主眼は、二次性のどもりに変っていかないように、〝予防〟することです。これについては次回に詳しく述べますが、この時期に効をあせって、適切でない矯正技術などを用いて指導をすると、かえって、あっという間に子どもを二次性どもりの悪循環の中に追い込んでしまう結果になることが、よくありますから、たいへん危険です。

いちどこのような二次性どもりの悪循環の軌道にはまってしまいますと、よほどの力でないとこれを断ち切ることは困難ですし、長い間の悪い癖が習慣化してしまっていますから、完全に治すのがとてもむつかしく、たいへんな時間と努力が必要になります。